

## 【私の回顧録】

当時は、男子の義務で兵役があったのである。そのことは二人共なんらの抵抗もなかった。兵役が済まんことには世間から一人前として認められないし又、世帯はもてないのが当たり前だったからである。

翌年の昭和十三年、東区役所で徴兵検査を受けた三郎は、甲種合格だった。十四年一月十日に馬場町の歩兵第三十七連隊入営と決まった。日支事変の真最中だけにいずれは戦地へ赴くことになり。そうなれば無事に帰れる保証は何もない。それだけに、きくには、若し良い話があったら嫁にいったらよい。と言ったこともあったが、きくは、待つと言っていた。がそんなことから一度、国元の椋本へ母親に会いに行くことになった。父親は早くに他界し居なかった。と云うのは、家の方からきくに、縁談の話がもちあがっていたからでもあった。

三郎は、湊町駅から関西線に乗って亀山駅へ、始めての汽車の一人旅だった。きくは前日に帰っていた。亀山から田舎道で峠を越して約一里ぐらいだったか、途中まできくが迎えに出ていた。始めて見る百姓家、前は茶畠になって入口には水溜りがあり肥料にするらしい。その奥は風呂場になって広い土間には釜戸があり大きな釜が二つ並んでいた。

「軍隊から無事帰れたらきくを嫁にほしい」と母親に申し上げると。「年が違うので気がかりだが、それでよかったですら末長く頼みます」と母親の「すみ」さん、多分こんな会話だったと思う。その母親のすみさんとは、三郎にはこれが初めての最後になったのである。

みのお公園に香里の成田さんに、二人で行ったことがあり、かくして年が明け一月十日の入営の朝を迎えた。当時、三郎の父は守口で「おかき屋」をしていたのでそこから出ることにした。が前日まで岡本で、荷物などはまとめてそのままにしてある。のれんのかげから見送っていたきくの目に、涙が光っていたのが心に残った。

赤いタスキを肩に掛け奉公袋を手にし、万歳の声に送られて三十七連隊に入った。そして動員令が下り、三十四師団二百十七連隊第二機関銃中隊として中支派遣となった。昭和十四年四月三日、大阪港より用船に乗って溝口へと向ったのである。大阪港の棧橋は大勢の家族が見送りに来ていたが、三郎には誰も来ていなかった。一寸さびしい気にもなったが、その反面心残りがなく気が楽なようにも思えた。ところが不思議なもので、大勢の家族や、恋人らしき人と別れを惜んでいる人ほど、戦地でいち早く戦死したりし、世の無情が感じられたものだった。

かくして、現地で衛生兵になり、中支各地を転々とし、負傷することもなく一度だけ、アメリカ赤痢で南昌の病院へ入院したことがあったぐらいで、衛生兵伍長として連隊本部医務室に勤務したりしているうち、満期除隊の日を迎えたのである。入営してから満四年に近い昭和十七年秋のことだった。そして鉄路、貨物列車で南京から北上して奉天へ出、そこから朝鮮半島を南下し、その年の十一月大阪馬場町の三十七連隊に無事帰還、即日晴れの除隊となったのである。が町並みは、大東亜戦争の真最中だけにすっかりさびれ、若い男性は殆んど見られなくなっていた。それだけに、このままだと何れ又招集があるのは目に見えている。と思ったのである。